
イプシロンの咆哮

浜田色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イプシロンの咆哮

【Nコード】

N4717U

【作者名】

浜田色

【あらすじ】

『アルファという犬』シリーズ三作目になりました。

今回は、前作を読まなくても読めるようになってます。

いつもの風景

梅雨も明けたばかりの、鬱陶しいくらいの夏の太陽が、白いスニーカーに反射して眩しい。灰色のアスファルトを蹴る音は、残りわずかの時間を一秒でも無駄にしたくない思いの表れだった。バタバタという音が、階段を不機嫌にさせる。細かい砂埃が、紺色のスカートに引っ付いて抗議しているようだ。

橋爪早苗の通っている中学校は音楽と美術に力を入れた中高一貫の私立学校で、彼女は音楽コースの中学三年生だ。

「やっぱいよく。ギリギリセーフいけるかなあ。」

廊下を風のように走って、勢いよく教室のドアを開ける。

チャイムの音と共に滑り込んだ早苗を、拍手で迎え入れたのは隣の席の内気な青年だった。

「お、おはよう、橋爪さん。」

少し掠れた声は、遅い変声期を迎えているのだろうか。笑った顔は十五才とは思えないほど幼い。早苗は、呼吸を整えながら机の中に教科書を荒っぽく納めると、「オハヨー、神崎君。」とにこやかに返事をした。

「お、おは、おは・・・よう。」

顔を真っ赤にして恥ずかしそうに話す青年を、早苗は苦笑いしながら、

「神崎君ってさ。三年間同じクラスなのに、まだ、人見知りするんだね。」

と、からかった。

「いや、ち・・・違うよ。まだ、眠たくて、ボーっとしちゃって。」
おどおどしていて華奢な体。長い手足が頼りなく揺れる様子が、いっそう神崎直人を気の弱そうな男の子に見せるのだ。

突然、早苗が立ち上がった。

「わーーーーしまったぁ。どうしよう。」

「ど、どうしたの？」

「宿題、忘れてた。」

もはや、恒例行事なのだろう。直人は笑いながら。

「数学の宿題なら、ノートあるけど、見る？」

「ほほほ本当ですかっ。」

特徴のあるアニメ声がさらに際立った台詞だったが、何も意識しているわけでないところが、たまに直人の笑顔を作り出す原因でもある。

「うん、大丈夫。どうぞ。」

「はー。有難うございます。神崎様。」

早苗が、時代劇でよく見る『お殿様に平伏す』ポーズをとってみせた。

「もう。いいから、橋爪さん。宿題やりなよ。」

「ありがとうっ。」

高速でシャーペン動かす指は、日ごろのピアノの練習の成果かもしれない。

「ありがとー。神崎君、助かったよ。今度何かおごるしさ。」

「別にいいよ。」

直人が顔を真っ赤にして俯く。

その柔らかい頬を、後ろから両手で触れられつつ、首筋に息を吹きかけられたのだから、直人は「キャッ」と女子の様叫びを出してしまった。

「神崎は、本当にウブだねえ。」

「こら、龍一郎。神崎君をからかわないの。」

直人の後ろに座っているのは、並木龍一郎だった。少し赤く染めた髪と片耳だけつけられたピアスが印象強くて不良に絡まれる事が度々あるが、彼は『俺は見た目だけでごくごく真面目な中学生だ』

と否定している。

その中学生が、脚を机の上に投げ出して、直人の肩に乗せて笑っていた。

「龍一郎。何してんの、神崎君も怒っていいんだよ。」

直人が弱弱しく、後ろを振り向く。

「並木君。ちょっと・・・。」

龍一郎のピアスがキラリと光った。

「いや、神崎。お前の言いたいことは、よく解る。だけど、よく考えてみるよ。何で俺がわざわざお前のズレ落ちそうな撫で肩に長い足を置いているのか・・・。」

「えっ。」

「まあ、俺が全治三ヶ月の脚の病気だと思ってほしい。バイクで転んだだけでさ。ギブスを付けられて膝も曲がらない、一回でも曲げてしまえば即切断だって医者が言いやがった。だから、俺だって本当は嫌なんだぜ。嫌だけど仕方ないから、こんな体制になってんだ。それを、お前は・・・どう思う？」

直人は、ゴクリと唾を飲み込んで。

「いいよ。僕の肩なら、いつでも使って。」

早苗が机を叩いた。

「ちよっとー。何でそんな事になるのよっ。嘘ばかり言って！」

「えっ。嘘だったの。」

龍一郎はケタケタと笑った。そのまま、優しく足を退けた。

「足は、治ったよ。ありがとな。」

「・・・。」

「それより、早苗。今月の課題曲は、もう弾けたのかよ。俺と神崎はもう合格点貰ったんだぜ。」

「うっそー。」

「居残り決定だな。」

「まだ、大丈夫だもん。三日残ってるもん。」

「テレビの見すぎじゃねえの。家帰っても練習してないんだろ。」

「言つとくけど。テレビは、見てないよ。」

「テレビは？」

直人の絶妙なツッコミに、早苗は「うるさい」と叫んで直人の長い前髪を掴もうとした。

直人が、すばやく身を退けた。

「もう、イケメンなんだから切っちゃいなよ。その前髪。」

「絶対ダメ！」

この時だけは、気の弱い直人とは思えないくらい強く否定される。早苗は、呆れた顔をして、借りていた数学のノートを直人に返した。

「本当、勿体無いよお。」

もう、同じような朝を何度迎えただろう。

居残らないように

早苗はピアノの先生になるという夢があった。幼い頃に幼稚園のクラスで何人かは、同じ夢を持った子供はいただろう。

その同じ夢を十年間、彼女は抱き続けているのだ。

決して自分に才能があるとは思えない。こんな才能溢れる同級生達に囲まれて、劣等感ばかり感じてしまう。今だって本当ならとつぐに皆が終わらせているはずの課題曲を聞きながら、居残りの恐れがあるくらい下手くそな自分の腕を呪いそうになった。

ピアノは好きだが、ピアノ無しでも生きられる。

だって、そればかりだとカワイイ服も買えないじゃない。

「ねえねえ、放課後の練習付き合って〜。」

鞆を肩に担いだまま、龍一郎は面倒臭そうに。

「なんで？俺、居残る理由なんて無いじゃん。」

「お願いします。鬼コワイ原西先生のゲンコツだけは回避したいの。」

両手を合わせて拝むふりをすると、直人は持っていた鞆を机に下ろした。

「僕、いいよ。何も予定ないし。」

「えっ。本当に良いの。ありがとう。神崎君はやっぱり優しい人だよ。」

直人が早苗に崇められている様子を、龍一郎が少し羨ましそうに見つめた後、ダルそうに鞆を肩から外してため息をついた。

「まあ、確かに？天才ピアニストの俺にお願いしたい気持ちは分かるけど？仕方ないから手伝ってやるけど。てか、あのジジイ。本当にこのご時世に関係なく殴るよな。」

直人は苦笑いしながら、「僕、殴られたことないよ」と言うと横からゲンコツが入った。

「お前は、ハラニシのお気に入りなのっ。」

「いった・・・。そんな事ないよ。僕だって怒られるよ。」

「まあ、ボコられるのは俺が悪いんだけど・・・。ピアノに俺のサイン書いたり、楽譜見て来るの忘れててサボってんのバレたり。勝手に教室でエレキギター弾いてみたり？ま、当然起こられるわな。」

まるで、武勇伝でも語っている風な言い方だった。

「でも、ハラニシは徳田の可愛がり方に比べれば許せる程度だけだな。」

「徳田先生？」

きゃー、と叫んだのは早苗だ。

「あの先生。絶対に・・・ホモだと思うの。」

間に入った早苗の目がキラリと光っている。

「お前、腐ってんな。」

「くさってません！」

龍一郎にもゲンコツが入る。

「並木君はそう言うけど、徳田先生って優しいよ。真面目だし。生徒指導の先生だから、ちょっと厳しいのかもしれないけど。この間だって、カツアゲされそうになったんだけど助けてくれたんだよ。」

直人の言葉に、二人は顔を見合わせた。

「ちょっと待てよ。カツアゲって誰に？ここの生徒か。」

「ああ、そう多分。でも、同級生で見ない顔だったから。後輩なのかな。」

「後輩・・・ね。」

直人の見た目は知らない人間から見れば、中学一年生でも通るだろう。二人はとも呆れた顔で。

「行くか？早苗、マックおごれよ。」

「うん。わかった。」

「えっ！なんで、二人とも無視するの？待ってよ。おいてかないで

よ。」

龍一郎の呆れ声が。

「お前、たまにだけど。ゲンコツしたい時ある。」

訳がわからず直人は首を傾げた。

「さっきだって、もう殴ったじゃないか。」



廊下で直人と龍一郎が待っていると、引き攣った笑顔の早苗が戻って来た。

「ちよっとー。聞いてよ！ハラニシの奴『ほー。言われる前に居残りか？その努力が報われればいいがな。』・・・だって。ムカツク！」

あずかった鍵を龍一郎に放り投げる。授業外でピアノを使う時は教員の許可がいるのだ。

むくれた早苗を慰めるのは、大体が直人ではなく龍一郎が先だ。

「まーまー。さっさと終わらせて帰ろうぜ。練習すれば絶対に出来るって。」

「私はいっぱい練習しないと出来ないの。」

「橋爪さん、がんばろう。」

遅れて直人が声をかける。

龍一郎は、まわりに天才児といわれて小さな頃からテレビで持て囃されていた。

その外見に似合わず、繊細で多彩な音を出す事ができる。せせらぎであったり、火山の噴火であったり、小鳥の囀りであったり。

様は引き出しが多いのだ。

同じ曲でも、早苗が弾くのとでは大違いだ。

「お前、ちゃんと記号読めよ。ここは流れる様に弾くんだって。」

「もお、精一杯してるの。どこをどうすれば良いか具体的に言つてよ。」

龍一郎がしばらく考えた後、

「あー。そういうの俺苦手。」

「ちよつと。」

「指を鍵盤から離すタイミングじゃないかな。」

直人が小さな声で呟いた。

「ホントに？じゃあ、ゆっくり離せばいいの？」

「多分、次の指が音を出す直前、くらい。」

「ありがとう。」

龍一郎が口をへの字に曲げた。

「なんだよ。神崎ばかり。」

「並木君は次の曲、もうもらってるんだよね。」

「お、おう。」

「すごいなあ。僕はまたやり直して言われたから・・・さすがだね。」

「ふっ、それほどでもないさ。龍一郎さまと呼びたまえ。」

早苗が慌て出した。

「えっ！ちよつと待ってよ。『もらった』ってパスしたって事？」

「まあな。」

教室に暗雲がたちこめる。明らかに、早苗の体から出たものだった。

「ダメだ。やる気無くなった。」

「早えーよ。」

「橋爪さん、居残りになっちゃうよ？」

がつくりと肩を落としたまま。

「いいの。もう、いいの。」

「どいたどいた。」

龍一郎が早苗に体当たりして椅子を奪い取る。

「せっかくなんだしよー。弾いてやんねーと可哀相だろ。」

骨張った指がしなやかに動き始めた。軽快なリズムが気持ちを浮上させる。早苗が何か思い出した様子で顔を上げた。

「あっ！その曲知ってる。今やってる映画のだよ。観に行きたいんだ。」

龍一郎が口をとがらせた。

「じゃあ・・・行くか。」

「うん。三人で。」

「ひっ・・・。」

「神崎君、どうしたの？」

「ご、ごめん。僕はやることがあるから。」

直人は龍一郎の殺意を感じ取ったので、ぎりぎり正しい答えを出す事が出来た。

「そっかあ、残念。」

今更だが、早苗は非常に鈍感な子供だ。

「直人もなんか弾けよ。」

話しを変えようと、龍一郎が直人を誘った。

「じゃあ、課題曲を弾こうかな。」

「よっしゃ、俺が見てやるよ。」

龍一郎は袖を捲ると、意地悪そうに笑った。

直人は恥ずかしそうに笑うと、ポケットから髪どめピンを取り出して前髪をあげる。そのままだと長い前髪が邪魔になって、楽譜が

よく見えないからだ。

くるりとした瞳が、どこか小動物を連想させた。日に当たらない肌が女の子のように白く透き通っている。

「やっぱり、そうしてたら絶対モテるのになあ。」

早苗がこっそり写メールを撮ろうと携帯を取り出したが、直人にバレて睨まれてしまった。

「ねえ、神崎君はどうして前髪伸ばしてるの？」

「えっ、お前。それ聞くの。」

龍一郎が、針が刺さったようにピクンと飛び上がった。

直人も、今は顔がはつきり見えているので丸い瞳をパチパチさせた。

「ねえ、何で？ おまじないなの？」

「それは、違うだろ……。なあ、直人。」

怖々様子を伺う龍一郎は、早苗の方を向いたときだけ『何でそんな事聞いたんだよ』と口をパクパクさせた。直人は、下を向いて言いたい言葉を見つけたようだ。

「やっぱり、落ち着くから。かな。」

「それだけ？」

「やっぱり、人、苦手だし。」

早苗が困った顔をした。

「私と龍一郎も怖いのか？」

直人は、とんでもないと首を振る。

「怖くないよ。」

「うっぎゃー。」

突然、直人は激しく早苗に抱きしめられた。

「よかったあ。ねえ、龍一郎☆」

龍一郎は、直人に死神のような笑みを浮かべた。

夜の闇と燃える夕日は

「神崎君。それでも練習してきたのか？先週から、ちっとも変わってないんじゃないか？」

原西の言葉が胸に刺さった。申し訳なさそうに直人が頭を下げる。丁度、ピアノの前で懺悔でもしているかのようだ。

「何か悩みでもあるのか。これでも一応教師だ。話しぐらい聞いてやるさ・・・なあ、どうしたんだ？」

直人は首を振った。幼い子供ならまだしも、十四にもなる子供がするのだから原西もどう扱っていいのか分からないようだ。

「君を三年間見てきたけれど、君は珠にそういう時期が来るよなあ。スランプというか、停滞期というか。自分で原因は分かっているのか？」

「・・・はい。」

「何なんだ。その原因は。」

直人はまた俯いて動かなくなる。こうなってはもう彼が何も言わないのも、原西もよく分かっていることだった。

「言いたくないなら、それでもいい。けど、俺はそんな訳の分からない悩みで、君を許すわけにはいかないなあ。皆そうやって教えてるんだ。君にだけ特別扱いはできない、わかるだろ。」

「すみません。僕・・・。」

原西は、ふうっ、と息を吐いた。白髪の混じった髪をボリボリかくと開いてあった楽譜を閉じた。原西も、直人が怠けていたとは本気で思っていない。

「もういい。今日は帰りなさい。」

「すみません。」

とぼとぼと落ち込んだ直人が教室を出ようとドアに向かう。思い出したように原西が直人を呼び止めた。

「ああ、そうだ。徳田先生がフランスに留学生を推薦する事になっ

てるんだが。お前をどうかと言ってるぞ。」

「えっ、僕ですか。」

前髪が揺れて、赤く染まった頬がよく見えた。

「断る理由がなかったから、話しだけ伝えておく、と言っておいた。家に帰ってご両親に話しとけよ。お父さんだって喜ぶんじゃないか。」

直人は下唇をぎゅっと噛んだ。

「お父さん、今フランスにいるんだろ？」

「・・・はい。」

それきり原西が何も言わなくなってしまったので、直人はお辞儀をして部屋を出た。

時間はもう日が落ちて廊下は真っ黒なトンネルになっていた。何処へ続くか分からない恐怖に青年はゴクリと唾を飲み込んだ。顎を引くと、完全に顔は前髪で見えなくなってしまう。どちらが前なのか分からないくらい。

「怖くない。」

ずっと歩いていれば、それはただの闇なのだから悪さはしない。

直人はピアノを弾く時以外、前髪を下ろしたままだ。だから、昼間でも他の人よりは少し暗い世界を歩いている事になる。明るい所も暗い所も、彼にとっては怖くて仕方がない物なのだ。

早足で歩いていた足が止まった。

「僕はどうすればいい？」

闇の中から、返ってくるはずの無い返事を待っているかのようだ。

「本当は、まだ考えてるんだ。」

少しだけ顔を上げると、現れたばかりの月が優しく彼の顔を照らした。

だが湿気を含んだ闇は、まるで生き物のように重たく少年の肩に縋り付いて離れない。

「僕は、まだ・・・彼を、助けてあげられるんじゃないかって。」



今日も、三人は教室で練習していた。

早苗は二人の微妙な助けを借りて、居残りは阻止できるだろうレベルまで上達していた。

「よかったー。これで夏休みの補講はナシー。」

「多分だぜ。た・ぶ・ん。」

「龍之介のイジワル。なによ。」

早苗がふざけて龍一郎に尻アタックした。

「いってーな。」

「大げさねえ。」

直人が困った顔をしていたが、龍一郎のポケットから何かが落ちるのを見逃さなかった。

「並木君。ポケットから何か落ちたよ。」

「あ。」

龍一郎が落としたのはライターだった。早苗が顔をしかめる。

「こらー。アンタ煙草吸ってるんでしょう。止めなさいよ。」

「ちげーよ。」

「じゃあ何で、ポケットから出て来るのよ。」

「さー何でかなあ。」

龍一郎がカチカチと火を付けたり消したりして遊んでいる。僅かな空気の違いに気がついて龍一郎が眉をよせた。

「おい、神崎。どうしたんだ？」

すぐ隣で僅かに震えている直人がいた。前髪のせいで顔が見えないが、それでも分かるくらいの恐怖。

「早く消して・・・。」

「なーんだ、そんな事か。大丈夫だってば、火遊びにも入らねーよ。ほらほら。」

龍一郎が面白がって直人の前で火をちらつかせる。

「消してってばっ。」

「龍一郎、嫌がってるでしょ。止めなよ。」

早苗が直人を守るので、龍一郎は「ちえっ」と、つまらなそうにポケットにライターをしまった。

「はあ・・・はあ。」

「大丈夫。」

直人が喉を苦しそうに押さえている。

「なあ、悪かったってば。」

龍一郎の手が直人の背中に触れる。

すぐに龍一郎はびっくりして、その手を引いた。

「すごい汗。」

「もしかして、火が怖いんじゃないの。」

「ご・・・ごめ・・・迷惑かけて。」

直人の顔は真っ青だった。

「いや、ホントにゴメン。俺、こんなつもりじゃ。」

「大丈夫だから。」

早苗が慌てて楽譜を片付け始める。

「ほら、行こうよ。もう下校時間過ぎてるよ。」

周りを見渡すと校舎は静まり返っていた。教室の隅っこから何かが、息を潜めてこちらの様子を伺っているようだ。真っ黒なピアノも、冷たい金属の塊のようにみえた。

「怖いね。」

早苗がポソッと呟いた瞬間。

教室が赤く染まり始めた。壁も、ピアノも、真っ赤な焰に侵食されたようで、小さく悲鳴をあげたのは早苗だった。

「夕日だよ。」

龍一郎が諭す様に言った。二人に安心してほしいと思ったからだろう。

「やっぱり怒ってるんだ。」

直人が呟いた。

「私たち怒ってないよ？神崎君が心配なんだよ。」

「あんな所に閉じ込めたから。」

二人の会話が成り立っていない事に龍一郎が気づいた。

「お前さっきから訳わかんねえよ。俺達に伝わるように説明してくれよ。」

龍一郎の言葉に我に帰った直人は、「ゴメン、独り言。」と無理矢理作った笑顔を見せた。

事件

徳田はその独特の舌つ足らずな口調で、よく生徒に真似をされている。

直人は徳田に呼ばれて職員室のドアを叩いた。恐らく、原西が言っていた留学の件だろう。直人の顔は暗い。

実はまだ誰にも打ち明けていなかったのだ。

「原西先生から留学の話は聞いてんだよね。」

「は、はい。」

「じゃあ、ご両親とも話しをしたいから、いつが良いか聞いといてくれる？」

「あ、あの。」

「何？」

直人が迷っていることなど考えてもいないようだ。

「僕、ちよつと・・・まだ悩んでいて。」

徳田は信じられないとでも言いたげな顔をした。

「あのねえ、神崎君。これはすぐ名誉な事なんだよ。誰でも行けるわけじゃ無いつて事わかってるかな。理由でもあるの？」

直人は首を振った。

「いえ、特には。」

「無いんじゃない。じゃあ、迷う事なんてないんだから、素直に返事した方が賢いと思うよ。」

「・・・はあ。」

徳田は満足げに、にんまりと笑った。

「ああ。だけどね、留学するならあの子らとは仲良くするのは止めときなさい。」

「へっ？」

「並木と橋爪だよ。」

聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声、直人の使い慣れてい

る耳がやつと音を拾ったくらいだ。

「あんな成績も悪いし態度も悪いクズみたいなのと一緒にいるのは良くない。付き合いを変えた方がいいって言ってるんだ。あんなの足を引っ張られるだけで何のメリットも無いんじゃないかな・・・」

と、強く直人は背中を叩かれた。

「と、思ってたね。ハハハ、そんな顔するなって、神崎君の事を思っ
てじゃないか。」

直人の頭は真っ白だった。

徳田の笑い声が直人にとって、これほど耳障りな事はない。

非力な拳を握りしめて、怒りに震える自分を止める気などない。
いつもはずっと奥に忍ばせている直人の『なにか』が喉から零れ
出た。

「僕、お断りします。」

「何だって？」

「どうぞ、他の人を推薦してください。」

そう言うと、直人は職員室を飛び出していった。



「ねえ、明日の映画のチケットを買いに行った方が良いと思うのよ
ね。」

「あーそっか。水曜日だもんな。」

階段を下りながら、早苗と龍一郎は次の授業がある教室に移動中

だった。

「あ、知ってる？あそこの映画館ってね、『カップル割引』あるんだよ。」

「へっ。」

龍一郎が素っ頓狂な声を上げた。まさか、そこまではリサーチしていなかったらしいが、思わぬ言葉が出て顔を赤く染めた。

「えーそうなんだぁ……。で、で、でも明日は皆同じ値段なんだし、いいんじゃないね。」

「うん。そうだよ、だから早めに買いに行こうって言ってるんじゃない。すごい並ぶんだから。」

「……。うん。」

「でも、なんで神崎君来れないんだろうね。すっごく残念だなぁ。」

「……。さあ。俺も、残念だな。」

複雑な顔を浮かべながら、龍一郎は「じゃあ、放課後な」と踊り場の階段を見つめた。情けない自分の顔に、こっそりビンタをして上を見上げると、丁度、徳田が不機嫌そうな顔をして降りてくるどころだった。

「何だ？目が合ったのに挨拶もなしか？並木は。」

早速、嫌味を言われる。いつもの事なので龍一郎は反発もせず、面倒臭そうに「すいやせん」と肩をすばめた。

「お前みたいな奴が、なんで神崎と仲が良いんだ。脅して、金でも盗ってやしないだろうなぁ。」

「はあ。」

徳田は、龍一郎の赤い髪とピアスをじろじろ軽蔑の眼差しで見つめると、鼻で笑って通り過ぎていった。

「お前が足を引っ張ってんだろう。神崎の留学の件だって、事情が分かればすぐにお前を退学させるくらい訳もないことなんだからな。」

「何の話だよ？」

「とぼけるな。お前が何か言ったんだろう。そうでもなけりゃ、留

学の話を断るはず無いじゃないか。」

舌っ足らずな声が、階段の下でこだましていた。

不快な顔を上げると、直人が困った様子で階段の先で立っていた。龍一郎と徳田の会話を聞いてていたらしい。

「どういう事だよ、直人。」

直人は前髪で視線を隠した。

「俺のせいで留学の話し蹴ったって……。」

「違うよ。」

「じゃあ、徳田が言った事は何なんだよ。」

「知らない。」

龍一郎がその華奢な腕を掴んで、壁に直人をたたき付けた。

「んな訳ねーだろ。信じねーからな。アイツの事だから、どーせ俺」といって留学出来ないとか、成績が落ちるとか……そんな事言われたんだろ。」

直人がハッとして顔を上げた。龍一郎の苦痛に歪んだ顔が、はっきりと瞳に焼き付けられた。

「……ちきしょう。」

「並木君は何も悪くないんだ。」

やっと言えた言葉も、龍一郎の大声に掻き消される。

「お前のそういう所が嫌いなんだよ！」

胸倉を掴まれたと思うと、頬を殴られた。直人が勢いで廊下に倒れる。

「神崎くんっ。」

早苗の声だろうか。直人が思ったよりも下に落ちてしまったからかもしれない。

直人の背中にあるのは、下に続く階段だった。

「まただ。」

直人が心の中で舌打ちした。

全てがスローモーションの様だ。

直人は落ちる恐怖よりも別の事で頭が一杯だった。地面に落とされて気を失うまで、絶対に自分は冷静でいなければいけない。

（心配するまでもないが、『彼』は今此処にはいない。ずっと地下で彼の声が届かない箱の中でひっそりと、彼を待ち続けているのだが。）

強い衝撃が青年の体を襲った。

「あっ……つつ……。」

目が覚めた直人の下には、龍一郎が倒れていた。

「俺の方が痛えよ。」

「並木君？」

「あのままだと、頭からいつてたぜ。俺が庇ったお陰だからな。」

踊り場にある大きな鏡が、階段を駆け降りる早苗を映す。

「大丈夫！怪我してない？」

半分泣きながら、鏡にもたれる二人を揺する。

「今、原西先生が救急車呼んでるから。」

「……ごめんな。」

「バカ。なんでこんな所で喧嘩なんかするのよ。」

龍一郎が、ボンヤリとした目で早苗の頬を触ろうと手を伸ばしたが、早苗は視線の端で光った何かに意識を奪われて、体を引いて

しまった。それが、早苗が助かった理由でもあった。

上から下に閃光が走った。

べいと

重たい音と共に、何かが割れる音が、階段をこだまする。

龍一郎の後ろにあった鏡が割れる音だった。

水平にヒビの入った鏡はギロチンの様に彼の目に焼けた腕の上に落ちたのだ。

「あ、え？」

直人は壊れたテープレコーダーのような声を上げた。

龍一郎がその場に崩れ落ちる。彼の切断された肘の辺りから、遅れて鮮血が噴き出した。見る見る顔色が悪くなる。失血しているからだろう。

残された二人は、床に散らばった鏡の破片に照らされて、キラキラと銀河の中にいるようだ。広い銀河の中に二人だけ取り残されてどうしようかと途方に暮れている。

「ひ・・・いあ・・・あああ。」
早苗の叫び声は弱く、隙間を流れる風のようにだった。

選択の時、歪んだ時間

早苗が戻ると、直人はピアノの前に座ってこちらを睨んでいた。力のない足取りで、彼女は涙を我慢するのが精一杯のようだ。

「まだ、手術中だって。」

直人の隣に腰をおろして遠くを見つめる。

「やっぱり、無理みたい。だって、そりゃあそうだよ。あんなの、くつつく訳無いもの。」

ぼろぼろと雫の様にこぼれる言葉が直人を絶望へと導いてゆく。

あの惨劇を思い出すと、頭が真っ白になる。

閃光と赤い床が脳に焼き付いて何度もフラッシュバックする。

震える手で頭を押さえるが、直人の見た目よりも大きな手が優しく髪を撫でた。

「僕のせいだね。」

「そ……。」

そうかもしれない。

その言葉が自然と出そうになり、早苗は両手で必死に食い止めた。

私、なんて事を言うつもりだったの。

震える手で直人の肩を抱きしめて、しばらく時間が空いた後やつと「ちがうよ」と言う事ができた。

彼女は、その言葉で少なくとも彼を不幸にはさせない自信があった。例え嘘だとしても、自分だけは直人を守らないといけない。で

ないと、直人はこの世からいなくなってしまうのではないか。
涙が溜まって、視界が歪んでいるから、直人が今どんな顔をして
いるのか分からないがきつと同じように絶望しているはずだ。

失うことが恐ろしくてたまらない。

それは龍一郎も同様だ。

年月はかかるかもしれない。だけど、龍一郎はきつと立ち直る。
けど、直人は・・・。

「神崎君が悪いんじゃないよ。」

早苗の一言で、彼はきつと救われるはずだ。
そう、彼女は思っていた。

「ダメだよ。」

早苗がもう一度同じ言葉を注ごうとした。

「神崎君・・・。」

直人は首を強く振った。

「あの時も、そうだったんだ。」

「あの時？」

前髪の間から奇妙な光が見え隠れする。

「僕は、逃げた。」

「ねえ、何の事を言ってるの。今は、龍一郎の話をしてるのに。前
にもあったよね、そういう事。」

早苗は話が噛み合わないことに苛立ちを隠せなかった。いや、自
分が置いていかれるのが嫌だったのだろう。直人の視線は、ずっと

先。早苗の見えない世界を見据えているように思えたのだ。

「どこ見てるの？こっちを向いてよ。もう・・・分かんないよっ。」

直人は、絶望なんてしていなかった。

早苗が理解できない世界の狭間で悩んでいるのだ。

「もう、同じ思いはしたくない。もう、逃げられない・・・今、僕は選ばなくちゃいけないんだ。」

「かんざき・・・くん？」

直人が立ち上がる。

強い風が吹いて、前髪が揺れる。

早苗を見る目つきがいつもと違うかった。もっとおどおどしていて優しかったはずだ。

「ゴメンね。僕、行かなくちゃ。・・・を、●●を変えるんだ。」

「何て？よく聞こえないよ。」

細長いからだが早苗の腕を摺り抜けて廊下に飛び出す。彼は前からこんなに早く走れたのだろうか。

じゃあ、いつもの早苗がよく知っている直人は本当の直人ではなかったのだろうか。

「ど、どこ行くのっ。」

叫んだ頃には直人の姿はどこにもなかった。

ただ、静かにピアノだけが教室に残されて寂しそうに佇んでいるだけだった。

「嫌だよ。一人にしないでよ。」

早苗が泣きながら、一人ぼっちで廊下を歩く。

丁度、病院に向かう原西の車に乗せてもらい、早苗は流れる車の

ライトを見つめながらいろんなことを思い出していた。

「一番悪いのは、きっと私だ。私が二人をもっときつく止めていれば、あんなことにはならなかったんだ。」

運転席の原西は何も言わない。

「映画、行こうって行っただじゃんかあ。バカア。」
今でも思い出す。

階段から落ちてゆく二人。

ぶつかった踊り場の鏡にヒビが入って床に崩れ落ちる。

それを、龍一郎と直人は青白い顔で見つめた。

あれが二人に落ちていたらどうなっていただろう。



細いから良いというわけでは無い。ある程度の長さがあって、程よい肉付きと透き通るような肌があって初めて、綺麗な脚といえる。その扱い方も美しくなければ意味は無いが。

大人の女性は大変だな、と早苗は思う。病院の待合室に座っている若い女性をみて、ふと思ったのだ。

顎のラインで切り揃えられた髪の毛も艶があって色気を感じさせる。襟から覗く鎖骨が艶かしくて、見る事が罪の様だ。長い指には指輪が光っているが、それは右側の方だった。

「かわいらしいお嬢さんね。」

若い女性は一っこと笑いかけた。じっと見つめていたのがバレてしまったのだろうか。顔を真っ赤にして早苗は、直人の様におどおどしてしまった。

「照れなくてもいいのに。あなた、●●中学校の生徒なの？」

「は、はい。」

「あそこの制服、カワイイから羨ましかったの。私、美術も音楽もからきしダメだったのよね。」

「ピアノをやってるんです。」

「そう。」

早苗は二人きりの待合室でドキドキしていた。初めてあったのに不思議と話し掛けたくなってしまう。

「お見舞いですか？」

聞いた後で早苗は物凄く後悔した。この階は集中治療室に運ばれたり、生死をさ迷っている患者ばかりなのだ。余計な事を聞いてしまったと、早苗が落ち込んでいると。

「違うわ、友人を待っているのよ。」

と、答えたのでほっとした。

ん、待てよ。病院を待ち合わせにする人間なんているのだろうか。

「友人も、あなたと同じ学校に通ってるわ。」

「その人って……。」

「あなた。橋爪早苗さんね。」

女性の顔が歪んで見える。

突然、早苗が激しく苦しみだした。

「大丈夫？」

「うっ……お腹が。いた、い。」

女性の柔らかな手が早苗の背中を摩った。

「歪んだわね。」

「何？」

女性の方も、よく見ればうつすら汗をかいている。

「多分、もうすぐ終わるわ。」

ドアが開く音がすると痛みは治まり、中から直人が現れた。

「神崎君。」

直人は、早苗と目を合わせなかった。小さなスーツケースを持って、早苗ではなく若い女性のほうと目を合わせると、見たことのないような冷たい顔をしてスーツケースを差し出した。

「いいのよ、あなたなのでしょう。あとで電話だけして頂戴。」

直人は、ばつの悪い顔をして早苗たちから遠ざかっていった。

「反抗期かしらね？」



直人が病院の階段を駆け降りる。

「おい、神崎！」

聞き覚えのある声に呼び止められて振り向くと、原西だった。ガ―ゼを貼付けた額が痛々しい。

「ああ、これは慌てて来たから転んで怪我したんだ。転んだのが病院で良かったよ。」

と、恥ずかしげに笑う。

直人は申し訳なさそうに頭を下げた。

「すみません。僕が悪いんです。」

ずっと我慢していた涙が、今だとばかりに流れ落ちた。

「お前一人の所為じゃない。橋爪から大体の事は聞いた。徳田先生も一枚噛んでるんだろ。」

「いえ、先生は。」

直人が否定するのを、原西はゲンコツで制止した。

「関係あるんだろうが。徳田先生が言ったこともちゃんと橋爪から聞いたんだ。なんで庇う？教師だからか。」

「そんな・・・。」

「いいか。神崎。」

原西は、階段に座り込んだ。エタノール臭で満たされた空間は、決して清浄な場所だとは思えなかったが、諦めたように直人は横に座った。

「並木の怪我は幸い骨折で済んだ。」

直人は何か言いたげだった。

「でも・・・僕。」

原西の大きくて皺の入った手が、直人の頭を掴んだ。

「そうだな。軽い重いじゃないよな。でもな、これは並木だって徳田先生だって同じくらい悪いんだ。発端は徳田先生だし、喧嘩を始めたのも並木からだ。」

「でも、僕がはつきり訳を話してれば、並木君は怒らなかったし、怪我もしなかったんですね。」

原西は、少し考えた後。

「さあ、どうだろうな。」

と、頭を掻いた。

「そういう可能性があるだけだ。それに起こってしまった事はどうしようもない。」

残酷な答えだが、原西は嘘をつくのは嫌だったのだろう。

「何もかも、どれか一つの理由だけで起こるものではないんだ。これが無くなれば、過去が変わるなんて・・・そう単純なものではないさ。だから、皆悪いんだよ。」

直人は、はっとして顔を上げた。

「そうか。だから、簡単に過去を変えられないのか。」

「何か言ったか？」

原西が怪訝な顔をした。

「いえ。」

「だから俺が言いたいののはだな。お前の中だけで完結することが、本当に正しい答えなのかよく考えた方がいいってことだ。」

「はい。」

「諦めて欲しくないんだ。先の事はまだ決まってない、自分が将来

を作るんだぞ。お前一人で何もかも解決できると思うな。それが正しいことだとも思うな。間違ってもいいから、この世界とちゃんと向き合え。」

直人はスーツケースを抱きしめた。幼い子供がぬいぐるみを抱くように・・・物言わぬ友達のように。

直人がポケットから、ヘアピンを取り出して前髪を上げた。涙でグシャグシャになった顔がはっきりと見えた。

「そのほうが、今のお前に必要な事を教えてくれるさ。だから、いいことを教えてやる。神崎がこれから変えられる事の一つ・・・一番始めにやらないといけないことだ。」

「何ですか？」

「並木とちゃんと話をしろ。」

「・・・はい。」

フラフラと直人が立ち上がる。が、原西は慌てて直人を受け止めた。

「何だ、この怪我？ 一体どこで・・・」

原西の手は赤い。

「・・・これは。」

そのまま直人は意識を失った。

直人の告白

病室のドアを開けると、龍一郎は漫画雑誌を読みながらお菓子を食べている所だった。

「おー、直人。お前も食べる？」

「僕はいいよ。」

「あっそ。」

側の椅子に座って、しばらく龍一郎の右腕のキブスを眺めていた直人が、小さな声で「ごめんね」と言った。

「だからよー。なんでそうすぐに謝るんだよ。」

「龍一郎君が言った事は当たってたんだ。」

龍一郎は雑誌を横に置いた。

「当たってたって？」

直人は龍一郎の目をじっと見て、覚悟したように話し出した。

「あの時は、違うって言ったけど。確かに徳田先生は、留学するなら二人とは付き合うなって忠告された。二人の事、『クズ』だってだから僕、腹が立って……。」

「もう、わかったよ。」

「だって友達がそんなこと言われるなんて……本当に腹が立って。僕、こんなに怒ったの初めてだったんだ。徳田先生があんな人だとは思わなかったよ。それに……。」

「もういいって……ありがとうな。」

龍一郎が恥ずかしげに顔を背けた。使える方の手で鼻を擦りながら。

「俺も悪かったんだよな。多分、ちょっと羨ましかったんだと思う。お前は先生に気に入られてるし、早苗にも……だけど俺は、こんなだろ。俺とお前が友達ってのも周りからしたら変に見えるんだよな。留学の話だって、俺の方が上手いのは何で？って思った。」

「じゃあ、本当は僕の方が上手いんだよ。」

「なんだとー。調子にノリやがって!」

殴るマネをすると、直人は吹き出した。

「よかった。やっと、笑ったな。」

「あ。」

「そのほうが、似合ってるぞ。」

龍一郎が直人のおでこを触った。短く切った前髪は、もう彼の瞳を隠すことはできなかった。

「それと、俺。聞きたいことがある。」

直人が首を傾げた。

「お前なんだろ。俺の腕、くつつけたの。」

ギブスのついた腕を軽く振って見せた。

直人は、少しだけ視線を外して。

「始めから、龍一郎君の腕は折れてたんだよ。」

「やっぱ、お前。嘘が下手だな。前髪無くなったからバレバレ。」

龍一郎が笑った。直人も笑ったが、観念したように両手を上げた。

「本当は、何もなかったようにしたかったんだけど、限界だった。」

これ以上の事をするとは皆が危険な目に合うから。」

「お前って、その・・・何でも出来るの?」

「その辺はまだ詳しく聞いてないんだ。」

直人は困った顔で答えた。

「実際は、僕の力じゃないんだ。イプシロンっていうのがあって、イプシロンの力が凄いんだ。僕は、ただの持ち主だよ。」

「ドラえもん・・・のび太みたいなやつか。」

「ちよっと、違うかな。」

直人が笑った。

「僕しかイプシロンの力は使えない。イプシロンに、選ばれた僕だ

けしか、使えないんだ。」

「その何とかって力で、地球を救ったりするのかわ？」

「まさか」と直人は首を振った。

龍一郎はいまいち納得が出来ないようだったが、あまりに確信を持って直人が言うので、それ以上の事は聞かなかった。いや、聞けなかったのだろう。

これから先は、多分。世界が違う。

そんな気がした。

思い出したように机のお菓子を食べ始める。

「なんか、今度見に行く映画の話してみたいだな。」

「橋爪さんと、行くんだよね。」

「あ、ああ。俺達・・・その。」

龍一郎は顔を真っ赤にして俯いた。

「鈍い僕にだってわかるよ。良かったね、龍一郎君。」

友人は無言でお菓子を食べ続けた。

笑っていた直人が突然、発作の様に両手で顔を隠した。きっと、もう隠すものがなくなってしまったから、こうする事でしか自分を守れないのだろう。

「あのね。」

「どうしたんだよ、突然。」

「あのね、こんな僕を嫌いにならないで欲しいんだ。」

「ならねえよ。」

「ううん。今から言うことを聞いたら、きっとキライになるよ。」

「何だよ。」

長い指の間から、まだ言うことを迷っている目が泳いでいる。熱帯魚の様に水槽の中を泳いで永遠に繰り返される物事を暗示しているようだった。

「言えよ。俺、もう何言われても驚かねえし。」

「人を殺したことがあるんだ。」

「この力を使って、同級生を殺したんだ・・・燃やした。」

だから、火が怖いのか。

そう龍一郎は思った。

「本当は、生き返らせてあげたいんだ。でも、それは、イプシロンには出来ないんだ。過去を変えるのは、簡単には出来ないんだ。その子を生き返らせるには、この世界を犠牲にしないといけないんだ。」

「俺の腕だって過去を変えたって事なんだろう。俺の事は、助けたんだな。」

「・・・キライになるだろ、僕のこと。僕だって自分のこと嫌いになりそうなんだ。」

「俺を助けて、何か影響があったのか？」

「説明すると難しい話なんだけど、最小限に留めてる。」

龍一郎はボリボリと頭をかいた。

「女子だったら、嬉しいんだろうな。『きゃー私の為にそこまで！』ってな。」

直人は笑わなかった。

「俺、多分ジコチュウなんだろうな。」

直人はまだ、顔を隠したままだ。

「あの時もう弾けないんだなって思った。あんまり覚えてないけど、だから・・・世界の終わりだと思った。お前のいう世界とは違って、俺のはちっぽけな世界だけど。だけど、大体人間の考えている世界なんてそんなもんだと思うんだ。普段は自分中心の世界だと思っているし。地球規模で考える事なんて、テレビとか授業の中とか、どこか別の所の話だと思って分けてるんだよな。だから、本当に俺は自分のことしか考えてないんだと思う。俺は、酷い人間だと思う。」

直人の顔に張り付いている手を、龍一郎は引き剥がした。

「ありがとう、直人。」

涙でぼろぼろになった顔が見れるんじゃないかと龍一郎は思っていた。しかし、そこには今まで見たことのないような精悍な顔つきが現れたので、一瞬別人なのではと龍一郎は思った。だけど、すぐに情けない顔に戻ったので、ほっとして握った手を解いた。

「そろそろいかなくちや。」

「そっか。」

名残惜しそうに龍一郎が、直人の腕を握った。ギブスの付いた方の腕だ。

「俺が前みたいに弾けるようになったら、また三人で……。」

「ありがとう。じゃあ……。」

「離れても友達でいような。」

「うん、メールする。」

病室の外には、大きなキャリーバックが置いてあった。

直人は、それを転がしながら時計を確認する。

「あと、三時間か。」

『間に合うのか?』

いつの間にか傍にいたのだろうか。

皺枯れた、老人の声がした。

「そんなの、君がいれば大丈夫でしょう。」

エレベーターのドアが開くと何くわぬ顔で入ってゆく。

「でも。ちょっとだけ、よりたい所があるんだけど……お願いしても良い?」

一人ぼっちの箱の中で直人はボタンを押さずにキャリーバックを軽く叩いた。

『直人の望むところなら何処へでも。フランスでも良いが?』

「いや……そこまでは良いかな。」

遅れて、龍一郎が追いかけて来たのを直人は気づいていたのだろうか。エレベーターに乗った直人に間に合ったとばかりに、急いで開閉のボタンを押した龍一郎が愕然とした。

中にいるはずの友人が、何処にもいなかったからだ。

旅立ちのとき

「お花を手向けにいったんですって？」

まもなく離陸する飛行機の中で、直人は愕然とした。

隣の席には若い女性、古林美智子が待っていたからだ。

「誰から聞いたんですか？」

小さなスーツケースを開けると、中には白いスリッパが入っていた。それに履き替えると、幾分か窮屈な機内もマシになるというわけだろう。

「フランスまで、付いてくるんですか？まさか、下宿先まで？」

直人が、怯えた様子で体を古林から遠ざけた。

「いいえ、私も仕事があるの。だけど、お望みなら付いて行ってあげてもいいわよ。」

長い足が美しい曲線を描きながら組まれる様子をみて、思春期を迎えた青年が顔を赤くしない訳が無い。

「ま、カワイイ子。」

「いい加減にしてくださいよ。ちゃんと向こうでも連絡はとれるようにしますから。」

「前に、会ったときはもっと素直で良い子だったのに・・・大人になったのね。さっき見送りに来てたのは彼女かしら？そういうえば、病院でも会ったわね。」

「ただの、友達です。根掘り葉掘り調べるんですか？MNKって。」

MNKとは、日本に存在する（はずの）組織である。

未知（M）能力開発（N）研究所（K）の略名で、まだ解明されていない不思議な力を調べる組織団体で彼女はそこの職員なのだ。

「いいえ、ただの個人的な興味よ。ごめんなさいね。」

古林は、細い指で揃った髪を撫でた。

「それより、イプシロン。あなたの所為で私、とても大変だったのよ。今だって、頭痛薬を鞆に入れてるの。思い出したように頭が痛くなるんだから。」

直人の細い脚を睨みつけた。

「ごめんなさい、あの時の事ですよね。僕、精一杯考えたんですけど。あれしか方法が思いつかなくて。」

『そうだ。直人は悪くない。それに、お嬢さんに文句を言われる筋合いはないな。我々だって、どんな風に歪みが起こるかなんて分からないのだから。』

皺枯れた老人の声が、直人の足元から聞こえてくる。

「まあ。」

彼女の美しい足の先、とがった靴が青年の脚を小突いた。

『直人は、非常に頭の良い子供だ。私の見込んだとおりだった。彼の提案を持ちかけられたとき、私はあまりの利口さに拍手をしたかった。もちろん、そういう気持だったという話だが。』

「手がないですものね。」

勝ち誇ったように古林が言うのを、何でも無いようにイプシロンは話を続けた。

『歪みは、過去を変えるときに起こるもの。その重さは事実に関わった人間に比例する。それを十分に直人は理解しているという事だ。どちらにしろ歪みを起こすなら、最小限にする努力をして欲しいものだ。』

「なるほど。事実に関わる人間の範囲を絞ったって事ね。」

直人は、表面的に微笑んだ。

「ええ、そうです。腕を元通りに戻すとなると、龍一郎君が怪我をしたことを知っている全員分の歪みが起きる。でも、『怪我をした』

という事実を残しておけば、『腕が切断された』事実を知る人に限られてくるから、ずっと少なくなる。ちょっとかもしれないけれど、歪みはマシになるんでしょう？」

「そうね、理論的には。そうでしょう。」

『賢い子供だよ。アルファの言ったとおり、冷静すぎる所もあるが・
・私の持ち主として不足は無い。』

イプシロンが自信たっぷり言うので、直人は顔を真っ赤にして「あんまり大きい声を出しちゃダメだよ」と下を向いて指を立てた。「その様子じゃ、留学先でも仲良くやっていけそうね。安心したわ。」

古林がクスクス笑いながら、そして思い出したように鞆から資料を取り出した。

「一つだけ確認したいことがあるの。」

「はい。」

「これは、どういうことなの？」

それは、診断書だった。

「耳の検査をしたのね。」

「ええ。」

青年は、点数の悪いテストが見つかったような顔をした。

「歪みが起きたときでしょう。どうして言ってくれなかったの？」

「問題はありません。」

『歪みは、持ち主にだって起こる。君だって知っていただろう。』

長い指が直人の右の耳に触れた。

「ええ、そう。知っていたのよ。でも、まさかこんな所だなんて・
・。」

右耳の近くで指を鳴らしてみる。直人は驚く様子もなく、むしろ気づいていないようだ。

「診断書には問題なしって書いてあるでしょう。」

青年は、古林の手を掴んだ。

「そういうことです。」

「でも……。」

「イプシロンの耳を借りることにしたんです。ピアノを弾くときだけ。」

「じゃあ、診察を受けたときも？」

「方耳が聞こえないんじゃ、留学なんてできるわけ無いでしょう。僕は決めたんです。勉強してピアニストになるって。それに、イプシロンがずっと一緒にいるんですから。何があっても乗り越えられますよ。」

古林は、何だか申し訳ないような気になって「ごめんね」と呟いていた。直人の性格が移ったのかもしれない。いや、もしかすると二人は似たもの同士なのかもしれない。

「古林さんの所為じゃないんですから。それに……僕は、この方がいいと思ってるんです。」

丁度、飛行機が離陸を始めた。

超音波のような高い音が、鼓膜を掴んでいるようだ。

「僕は、やっぱり何もかも忘れるのはズルい事だと思います。あの子の事も、龍一郎君の事も、忘れてしまえば幸せなのかも知れない。でも、それは僕が許さない。」

涙は流れない。

優しく髪を撫でる手が、少しだけ震えている。

「強くなったのね。」

彼女は笑っているのだろうか。

少しだけ、ぼやけた視界が直人を苦笑させる。

「まだ、そんなに強くないです。今だって、ほら。涙が溜まってるんですから。」

古林の口から笑い声がこぼれた。

「そうだわ、フランスにいたら会って貰いたい人がいるの。」

「はい？」

「大学の教授なのよ。ちょっと変わった人だけど、あなたに会った
らきっと喜ぶわ。その時間はあるかしら。」

「た・・・多分。」

機内アナウンスが流れた。それを聞いて古林の眉間に皺が入った。
「まあ、大変。『天候が悪くなったため、空港に引き返します。』
ですって。」

残念そうに窓の方を見ると、どんよりと黒い雲が今にも飛行機を
包み込んでしまいうだった。

「ねえ。これって、どうにか出来るの？」

直人がイプシロンに囁く。

『勿論。』

途端に、飛行機の中が真っ暗になった。

飛行機の中で風が吹くはずが無いのに、強い風が後ろから前へと、
乗客の叫び声を攫って行きながら大気中へと飛んでゆく。
まるで、生きている様だ。

オオオオオオ

猛獣のような唸り声が、空一杯に響き渡る。
黒い雲が、恐れをなして逃げてゆく。

眩しいくらいの快晴。

「ありがとう。」

古林が、直人の腕の中に抱かれているスリッパを撫でる。

なぜだろう。

兎のような真っ白でふかふかのスリッパが、満足そうに寝息を立てているようにも見えた。

白い友達（前書き）

直人のその後を・・・番外編みたいなものです。

白い友達

神崎直人は深いため息を着いた。フランスに着く前に少しでも語学を勉強すればよかったと後悔しているのだ。

「ここであってゐるんだけど、どうすればいいんだろう。」

小さなメモ帳を両手で摘んで、じっと睨めっこをしていた。

『考えていても、仕方がない。誰かに話しかけてみればどうだろうか？』

「えっ。そそそ・・・そうだよね。」

頬を軽く叩いて、気合いを入れた。無理もない、周りは直人が理解できるはずのない言葉で会話しているのだから。

「で・で、でも、ここは大学なんだから、僕みたいな留学生がいるかもしれないよね。ああ、そうだ、日本人っぽい人を見つけて話しかけてみよう。」

『そうだな。確かに、いるかもしれない。流石、直人だ。』

先程から聞こえる皺枯れた声は勿論、イプシロンだ。直人が抱きしめている鞆の中にいるのだろう。

「あの人は、どうかな？」

『話しかけてみればいい。』

直人は、大きく頷いてベンチから立ち上がった。

それが間違っていることに気付いた時は遅かった。近寄ってみると、髪も瞳も灰色がかっているし、こちらの血は混じっているかもしれないが、顔立ちが日本人の『それ』とは若干異なっていた。だが、ここまで来たら仕方がない。

「「やるっきゃないよ！」」

直人は見えない友人の（恐らくイプシロンではない）声に励まされ、今にも消えてなくなりそうな自分を必死に奮い立たせて、恐る恐る口を開いた。

「あ・・・あの。」

「？」

「うっ、えっと・・・僕は日本から来たんですが。えっと、じじいやジャパン、アイアムジャパン！・・・うあああ。何言ってるんだろう、僕。」

泣き出しそうな直人を、彼は困った顔をして膝を曲げた。直人は背が低い方ではなかったが、目の前の男は直人より遥かに背が高かった。同じくらいの顔の位置で、男は驚く事に直人の理解できる言葉で話し始めた。

「君がそんなにオドオドしてるから、僕が何かしたと思われてるじゃないか。」

「・・・？」

周りを見渡すと、こちらを心配そうに見つめる人が何人もいる。「日本語なら解るよ。僕、そっちが専門だから。どうしたの？お母さんでも捜してるのかな。」

直人は、さっきの狼狽ぶりが恥ずかしくて赤面したまま首を振った。

「違うんです。でも、人は捜してます。あの・・・」

汗で少し湿ったメモを男に渡した。

「ふうん。この人に会いたいんだ。」

「はい。」

男が立ち上がると、ふわりと優しい風が吹いた。直人には、この男が頼みの綱なのだろう。

「いいよ、案内してあげる。付いておいで、マルコ！」

「マルコ？」

って、僕のことですか？と聞きたかったのに、気付けば三歩先があるいている男を、直人は慌てて追いかけて行った。



「この人をどうして捜してるのか、聞かないんですね。」

直人は階段を上がりながら、ふと男に尋ねてみた。

「まあ、いろいろ思いあたる節があるから。」

男は、学生のようなだった。黒くて太いフレームの眼鏡に、クシャクシャの髪、そしてなぜかスボンのポケットに入っている携帯がしきりに彼を呼び続けていた。

「今、教授会なんだ。教授達は皆、会議室にいつてる。」

「ああ。じゃあ、いらっしやらないんですね。」

「君は、いちいち失礼だね。」

「へ？」

首を傾げる直人をよそに、男は部屋のドアを開けた。

「どうぞ。」

中に入ると、そこには綺麗なモバイルが飾られていた。くるくると回ると七色の光が室内を照らす。まるで、この部屋が大きな万華鏡のようだった。

直人が見とれていると、奥のドアから老婦人が現れた。右手には受話器を握っている。

『もうっ。何度電話したと思ってるの。教授達が捜していたわよ。』
直人には、婦人がとにかく怒っていることしか分からない。

『サリー、お客さんの前で失礼じゃないか。』

母親に怒られた子供のように、男が言い訳しているのは・・・それは直人にも理解が出来た。直人の気弱な目と婦人の目が合った時、

婦人は「この人、いつもこんな感じなのよ」という顔をしたので、安心してクスッと笑った。

「とにかく座ったら？」

目の前の椅子に座ると、婦人は受話器で何か話をしながら奥のドアへと戻っていった。

男も座って、かけていた眼鏡を外しながら。

「それで？ 僕に何の用事なの。」

「えっ。オジサンっ教授なの？」

「・・・せめて、お兄さんと呼んでくれないかな。」

直人は驚いた。大学の教授と聞いていたので、てっきり五十嵐のような年配の男を想像していたのだろう。

「まあ、よく学生と間違われるけどね。」

男は靴を脱いで椅子の上にあぐらをかいた。二人の間を挟むテーブルの上のお菓子を摘むと、モグモグと食べている。よく見ると、動物クッキーだったので直人は軽い目眩を起こした。

『サボってる最中に、マルコに捕まったんだ。』

お茶を運んで来た婦人に、男は説明した。

『でも、ジル。この子には白いサルがないわ。』

『確かにね。』

それは、お茶ではなくココアだった。直人はココアに口をつけながら、二人の話を聞いていたが。

「お猿さんじゃないですけど、白い友達なら、いつも一緒ですよ。」と、笑った。

『君、フランス語わかるの？』

「え？」

『いま、フランス語で話してるんだけど・・・』

直人は、ハッとして右の耳を押さえた。「翻訳出来るのなら、始

めから言ってくれば良いのに」と拗ねた顔をする。

「あの・・・説明します。これは、その白い友人の仕業なんです。」
靴の中から取り出された物は、白いスリッパ。膝の上にちょこんと乗っている様子は、ウサギのようだった。

「僕の、友達です。」

男の顔から笑みが消えた。眼鏡をかけ直して「ダテなんだよ」と、言い訳しながらそっとイプシロンに触れた。

「名前は？」

「イプシロン。」

「君の名前は？」

「神崎 直人です。あ、あの・・・」

思った以上に気持ちが良かった様で、生き物を触るように撫でながら「ミナミでいいよ」と笑った。

不思議そうに見つめるのでもなく、何かを悟ったような顔。

『いいの？』

婦人が心配そうに見守る中、男はココアをすすった後で子供の様に笑った。

『大丈夫だよ。サリィ、この子も僕と一緒にいたい。』

『まあ、まだ幼いのに。』

悲しい目で、婦人が直人を見つめた。直人は否定するように首を振った。「僕は、幸せです」とでも言いたげに。

「マルコみたいに、僕にも、そういう友人がいるよ。まあ、君みたいに持ち歩きが出来ないのが、ちょっぴり残念なだけだね。そう
だろ、シャク。」

ぽん

と、叩かれたのは、男が座っている椅子だった。

イプシロンの白い毛並みが僅かに逆立っているのを感じた直人は、見た目よりも大きな手で優しく毛並みを抑えつけた。

「古林さんから、伝言を頼まれているんです。」

「へえ。」

首をかしげながら。

「なんだか、よく分からないんですけど、『長旅お疲れ様』って伝えてくれて。」

「・・・はあ？」

怒りにも似た、叫びが直人の敏感な耳を襲った。

『どうしたの？』

今度は婦人が言葉を理解できない番だった。

『どうやらMNKは、僕が「あんな酷い目」に会うって事を、知っていたらしいよ。』

『まあ。』

頬を膨らませて怒っている様子は、さっきまでの冷静な男とは思えないほど子供だった。

『彼女も、一言仰ってくれば良かったのに。』

頬を膨らませながら、椅子・・・いや、ゼータをガタガタと揺らした。

『美智子くんは、そういう人間だよ。もう・・・慣れた。』

『振り回されているように見えるのは気のせいかしらね。』

婦人は、空になったカップを下げると、二人を残して部屋を出ていった。

いや、正確には四人と言うべきだろうか。

「さて、直人君。君は、フランスは初めてなの？」

「は、はい。長い間いるので、いろいろ観光もしたいなあって思ってるんですけど。」

（案内してあげるよ。）

それは、どこか幼さを残したソプラノの声。

（ねえ、良いだろ。ミナミは教授達のお説教の時間でしょう？）

『相変わらず元気だな、ゼータは。』

今度は皺枯れた老人のような声。直人はそのどちらも心地よい音色だと思ったようだ。

「うん。僕、いろいろ教えて欲しい。こっちにはまだ、友達もいないし。」

（じゃあ僕と友達になろう。ねえねえ、どこに行く？ミナミ早くどいてよ。）

「浮気するなよ。」

不機嫌そうに男は席をたった。直人に向かって執事のようにお辞儀をして、椅子に座るよう勧める。

「いいかい、シャク。マルコは繊細な子のようなだから、丁重にオモテナシして差し上げなさい。」

（はあい。）

直人はイプシロンを抱いたまま、そっと椅子に座る。

男が見守る中、彼らは姿を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4717u/>

イプシロンの咆哮

2011年12月3日19時48分発行